

ホーリネス系教会に関わる青年の 「キリスト教における宗教性」の発達および援助行動との関連

松島公望¹⁾ 宮下一博²⁾

¹⁾東京大学大学院総合文化研究科 ²⁾千葉大学・教育学部

The Development of “Christian Religiosity” and Helping Behavior of Holiness Church Adolescents

MATSUSHIMA, Kobo¹⁾ MIYASHITA, Kazuhiro²⁾

¹⁾Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo, Japan

²⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究では、ホーリネス系教会に関わる青年の「キリスト教における宗教性」の発達および援助行動との関連について検討した。まず、ホーリネス系教会に関わる青年（203名）を対象に、「キリスト教における宗教性（Glock, 1962; Verbit, 1970による）」の発達の差異を検討した。その結果、「クリスチャンであること」が「キリスト教における宗教性」の高さを示す要因となることが示唆された。しかし、「家族がクリスチャンであること」は「キリスト教における宗教性」の高さを示す要因にはならないことが示唆された。続いて、青年クリスチャン（107名）を対象に、「キリスト教における宗教性」と援助行動との関連を検討した結果、「キリスト教における宗教性」が援助行動に影響を与えないことが示唆された。

The purpose of this study was to investigate the development of “Christian religiosity (by Glock, 1962; Verbit, 1970)” of Holiness church adolescents, and its relation to their helping behavior. First, developmental differences in Christian religiosity of Holiness church adolescents (N=203) were examined. The result suggested that “being Christian” would be an important aspect of religiosity for Christianity, while “having Christian in one’s family” would not. Next, the relation between Christian religiosity and helping behavior of adolescent Christians in Holiness church (N=107) was analyzed. The result indicated that Christian religiosity would not influence adolescent helping behavior.

キーワード：宗教性 (Religiosity) 援助行動 (helping behavior) ホーリネス系教会 (Holiness church)
クリスチャン (Christian) 青年 (adolescents)

問題と目的

本研究は、ホーリネス系教会に関わる青年の「キリスト教における宗教性」（以下、本論文では単に「宗教性」と記す）の発達および援助行動との関連を検討しようとするものである。

ホーリネス系教会は、1901年、中田重治、宣教師カウマンらによって設立された東洋宣教会を母体として、1917年に創立された。また、ホーリネス系教会は、英国人ジョン・ウェスレーが興した「メソジスト運動」の流れを汲んでいるため、神学的には「メソジスト系」に近い位置に存在する¹⁾。こうした意味において、ホーリネス系教会は世界的にみても決して極端で特殊な教派でなく、キリスト教のオーソドックスな立場に布置している。

ホーリネス系教会を対象とする理由として、ホーリネス系教会は、他の教派に比べて個人の情緒的かつ自覚的な回心体験を重視する土壤があり、その信者は個人の信仰を自覚的に意識する傾向が強く、宗教意識を顕在的に

捉えやすいことが挙げられる。また、筆者は、ホーリネス系教会に属するクリスチャン家庭に育ち、ホーリネス系教会に関わった経験があることから、ホーリネス系教会に関わるクリスチャンの生育歴や宗教体験、考え方などを理解しやすいことも挙げられる。

さて、青年期においては、前期・中期では、宗教的覚醒がなされ自分が信者であることを自覚する者や、反対に宗教的権威や宗教教育に強く反発する者が現れるといわれるように（星野，1977）、「宗教性」が大きく変化する時期である。後期になると、宗教的権威などに対する反抗も、ただ否定するのではなく、その正しいところを正当に評価して受容できるようになったり、人生の意味や目的を深く、かつ冷静に考えることができるようになったりと安定したクリスチャン生活を送ることが多い（長谷川，1969）。このように青年期全般を通して「宗教性」は異なった様相を示している。

「宗教性」は、次のように定義される（松島，2006，2007）。「宗教性」とは、「個人がどの程度キリスト教的であるか」を測定する指標である。すなわち、個人がキリスト教についてどの程度、「信じるのか、感じるのか

(宗教意識)」、「振る舞うのか(宗教行動)」を表す。すなわち、宗教意識とは、信念や知識が関わる「認知的成分(信じる)」と情緒的な体験が関わる「感情的成分(感じる)」を含む概念であり、「行動的成分(振る舞う)」は宗教行動に相当する。つまり、宗教意識と宗教行動を包括する枠組が「宗教性」といえる(Cornwall, Albrecht, Cunningham, & Pitcher, 1986)。

「宗教性」に関する研究では、Glock (1962) が提示した「信念、知識、体験、行動、効果」の5次元が重要な指標とされており、多くの研究者によって引用されている(Hill & Hood, 1999; 杉山, 2004)。「信念」とは宗教的な教えを信じること、「知識」とは教義、教典に関する情報を有すること、「体験」とは回心体験などを含み、宗教的経験や宗教的感情を持つこと、「行動」とは礼拝、祈りなどといった特定の宗教的行動である。また、「効果」とは以上の4つの次元が信者の生活や行動、精神などに及ぼす(クリスチャンになることによって受ける)社会的、世俗的な影響を意味する。「効果」はさらに「報酬」と「責任」に分けられる。「報酬」とは個人における心の平安、悩みからの解放、幸福感などを指し、「責任」とは倫理的禁止の受容や、宗教集団における責務を全うすることを指す。

ただし、調査を実施する際には、この5次元は固定されたものではなく、調査研究の目的に応じて各次元を柔軟に使い分けたり、次元を新たにつけ加えたりしても良いとGlock自身が述べている(Glock & Stark, 1965, 1966)。今田(1955)は、個人の宗教性発達において宗教集団を始めとする宗教的環境から大きな影響を受けると示唆している。Verbit (1970) は、宗教の共同体としての側面に注目し、宗教的な組織への参加・貢献の度合、そこに友人や仲間が含まれる基準や程度などを問うものとして、「共同体」次元を提唱した。「共同体」とは、信仰を介した対人的・情緒的な関わりを指し、集団への帰属感や社会化の促進に関連する。また、「共同体」は、宗教意識に位置づけられ、「体験」と同様に感情成分に含まれる。日本においても、宗教集団における共同体の側面について注目し、その重要性を示唆している(杉山, 2004 など)。日本のキリスト教においても、クリスチャンとの関係が個人の「宗教性」に影響を与えることが想定されることから、本研究ではVerbit (1970) の「共同体」の次元をGlockの5次元に追加して検討する。

欧米では、Glock (1962) を始めとする「宗教性」に関する研究は数多く存在しているが(Hyde, 1990; Hood, Spilka, Hunsberger & Gorsuch, 1996; Hill & Hood, 1999; Spilka, Hood, Hunsberger, Gorsuch, 2003), これらの研究は、大学生および成人を対象にしたものがほとんどであり、発達の観点から検討した実証的研究は少ないといわれている(Hyde, 1990)。さらに日本では、キリスト教徒以外を対象とした、石黒(1984)、石黒・酒井・許・山田(1986)、杉山(2004)の研究がみられるに過ぎず、発達の観点から宗教性を検討した実証的研究はほとんど行われていない。しかしこれらの研究では、宗教性について、次元ごとに発達の差異がみられることを示唆している。

さらに、「宗教性」は、社会との関係のなかで発達す

ることから(今田, 1955)、クリスチャンと社会との関係を示すことによって、彼らの「宗教性」発達の特徴を明らかにしたいと考えている。そこで本研究では、クリスチャンと社会との関係を示すための指標として「援助行動²⁾」を取り上げる。すなわち、援助行動も社会との関係のなかで発達し(堂野・堂野, 2000)、キリスト教やキリスト教教育と密接な関わりをもつといわれていることから(安齊, 1985)、クリスチャンと社会との関係を示す指標として取り上げることとした。クリスチャンと社会との関係を示す指標として援助行動を取り上げることにより、家族や学校、地域といった社会との関わりの中からホーリネス系教会に関わる青年クリスチャン(以下、青年クリスチャンと記す)の「宗教性」発達を検討する。

「宗教性」と援助行動との関連を検討した研究については、日本ではみあたらないが³⁾、欧米では、数多くの研究が存在し(Batson, Schoenrade, & Ventis, 1993; Spilka et al., 2003を参照)、両者の間には概ね関連があるといわれている。しかしながら、青年期前期・中期の援助行動に「宗教性」が与える影響については研究が進んでいるとはいえない。欧米でも、大学生と成人を対象とした研究が大部分を占め(Batson et al., 1993)、高校生を対象とした研究はほとんどない(Schludermann, Schludermann, & Huynh, 2000; Sam & Gustavo, 2005など)。そこで本研究では、中学生(青年期前期)まで対象を広げ、青年クリスチャンにおいて「宗教性」が援助行動に与える影響を発達の観点から検討したいと考えている。

青年期では、児童期の受動的な「宗教性」から、自覚的な「宗教性」へと変化する(今田, 1955)。すなわち、青年期に入り、真摯に宗教を求め、回心体験をする(宗教的覚醒に到達する)ことによって、自覚的に「宗教性」を確立するといわれている(高橋, 1958)。しかし同時に、青年期の「宗教性」発達では、家族からの影響も大きいことも示唆されている(今田, 1955 高橋, 1958)。このように、青年期の「宗教性」発達では、「本人の自覚」と「家族の影響」の両方が関与していると考えられる。

そこで本研究では、「本人がクリスチャンであるかどうか=本人の自覚」および「家族のなかにクリスチャンがいるかどうか=家族の影響」に要因を分け、その2つの要因の違いから「宗教性」に差異がみられるかについて検討する。本研究では、分析のために対象者を以下の4群に分類する。すなわち、「自分がクリスチャンであり、家族にもクリスチャンがいる群(以下、クリスチャン・クリスチャン家族群: Ch-Ch群とする。他の群も同様である。)」, 「自分がクリスチャンであるが、家族にはクリスチャンがいない群(クリスチャン・非クリスチャン家族群: Ch-NCh群)」, 「自分はクリスチャンではないが、家族にはクリスチャンがいる群(非クリスチャン・クリスチャン家族群: NCh-Ch群)」, 「自分も家族もクリスチャンではない群(非クリスチャン・非クリスチャン家族群: NCh-NCh群)」の4群に分類する⁴⁾。

以上のことから、本研究では、まず第1に、ホーリネス系教会に関わる青年を対象に、「年齢段階」と「本人・家族内のクリスチャン有無(以下、クリスチャン別)」

による「宗教性」の発達の差異を検討する。第2に、青年クリスチャンを対象として、「宗教性」と援助行動との関連について検討する。クリスチャンについては、Ch-Ch群（クリスチャン二世；以下、二世と記す）およびCh-NCh群（クリスチャン一世；以下、一世と記す）⁹⁾に分け、両者の差異についても検討する。

以上を踏まえて、以下の仮説を設定し検討する。

- [仮説1] クリスチャンは非クリスチャンよりも高い「宗教性」を示すであろう。
- [仮説2] 家族がクリスチャンの場合はそうでない場合よりも高い「宗教性」を示すであろう。
- [仮説3] 青年期前期群（以下、前期群とする）が青年期中期群（以下、中期群）よりもキリスト教的意識が高いことが示されていることから（星野・安倍，1964；長谷川，1969；中村，1976），前期群のほうが中期群よりも高い「宗教性」を示すであろう。さらに実証的な結果は示されていないが，青年期後期群（以下、後期群）については，変化の大きい青年期前期・中期を終えて，より安定した宗教性を有するといわれていることから（長谷川，1969），後期群は，前期群，中期群よりも高い「宗教性」を示すと予想される。
- [仮説4] クリスチャンの「宗教性」は援助行動に影響を及ぼし，「宗教性」の高いクリスチャンは積極的に援助行動をとるであろう。
- [仮説5] 仮説3より，「宗教性」については，後期群が，前期群，中期群よりも高いと予想されることから，「宗教性」の援助行動に対する影響は，後期群のほうが前期群，中期群よりも高いと思われる。さらに，前期群と中期群では，「宗教性」の援助行動に対する影響は前期群のほうが高いと予想される。

方 法

1. 質問紙の構成

本研究の質問紙は，Glock（1962）とVerbit（1970）の「宗教性」に基づく宗教意識尺度⁶⁾・宗教知識テスト⁷⁾・宗教行動尺度，および援助行動尺度によって構成されている。

本研究で使用した質問項目は，以下の通りである。

(1) 宗教意識尺度

① 後期群 松島（2005）の成人版宗教意識尺度を使用した。本尺度は，「信念」4項目，「体験」9項目，「共同体」6項目，「効果報酬」5項目，「効果責任」5項目の5つの下位尺度からなる。選択肢は，「まったくあてはまらない，あまりあてはまらない，少しあてはまる，中程度にあてはまる，かなりよくあてはまる，非常によくあてはまる」の6段階評定（1～6点）である⁸⁾。本尺度の信頼性と妥当性は松島（2005）により確認されている。青年期後期（大学生）以降は，成人と同じ教会（クリスチャン）生活を送っていることから，成人版を使用することが妥当であると判断し，後期群では成人版宗教意識尺度を使用することとした（宗教知識テスト，宗教

行動尺度も同様である）。後期群における内的整合性は，「信念」： $\alpha = .892$ ，「体験」： $\alpha = .909$ ，「共同体」： $\alpha = .870$ ，「効果報酬」： $\alpha = .855$ ，「効果責任」： $\alpha = .906$ であった。

② 前期群，中期群 松島（2006）の中高生版宗教意識尺度を使用した。中高生版宗教意識尺度は，成人版宗教意識尺度（松島，2005）には中学・高校生が理解しにくい項目が含まれていることから作成された。本尺度は，「信念」4項目，「体験」7項目，「共同体」5項目，「効果報酬」4項目，「効果責任」4項目の5つの下位尺度からなる。選択肢は，成人版宗教意識尺度と同様である。本尺度では，本研究における前期群，中期群を含めて作成されており，その信頼性，妥当性が確認されている（松島，2006）。

③ 本研究で使用する項目 宗教意識尺度について，成人版，中高生版では異なる質問項目も含まれることから，成人版，中高生版の両方に対応している項目のみを抽出し，各下位尺度得点を作成した上で分析を行う。各尺度における対応している項目についてはTable 1に示す。

(2) 宗教知識テスト

① 後期群 松島（2007）の成人版宗教知識テストを使用した。本テストは，記述回答式および多肢選択法であり，8項目からなる。本テストの信頼性と妥当性は松島（2007）により確認されている。後期群における内的整合性は， $\alpha = .548$ であった⁹⁾。

② 前期群，中期群 松島（2007）の中高生版宗教知識テストを使用した。本テストも，宗教意識尺度と同様に，中学・高校生が理解しにくい項目が含まれていることから作成された。本テストは，記述回答式および多肢選択法であり，7項目からなる。本テストにおいても，本研究における前期群，中期群を含めて作成されており，その信頼性，妥当性が確認されている（松島，2007）。

③ 本研究で使用する項目 宗教知識テストについても，宗教意識尺度と同様に，成人版，中高生版の両方に対応している項目のみを抽出し，各下位尺度得点を作成した上で分析を行う。各尺度における対応している項目についてはTable 2に示す。

(3) 宗教行動尺度

① 後期群 松島（2007）の成人版宗教行動尺度を使用した。本尺度は，8項目からなる。選択肢は6段階評定（1～6点）であるが，各項目で選択肢の内容が異なる¹⁰⁾。本尺度の信頼性と妥当性は松島（2007）により確認されている。後期群における内的整合性は， $\alpha = .764$ であった。

② 前期群，中期群 松島（2007）の中高生版宗教行動尺度を使用した。本尺度も，宗教意識尺度と同様に，中学・高校生が理解しにくい項目が含まれていることから作成された。本尺度は，7項目からなる。選択肢は，成人版宗教行動尺度と同様である。本尺度においても，本研究における前期群，中期群を含めて作成されており，その信頼性，妥当性が確認されている（松島，2007）。

③ 本研究で使用する項目 宗教行動尺度についても，宗教意識尺度と同様に，成人版，中高生版の両方に対応している項目のみを抽出し，各下位尺度得点を作成した上で分析を行う。各尺度における対応している項目につ

Table 1 宗教意識尺度（成人版—中高生版対応項目）

項目数		成人版	中高生版
信念 3項目	1	私は、いくら豊かな生活をしていても、神に従わない生活は、本当に幸福だとはいえないと思う。	私は、豊かな生活よりも神さまに従う生活のほうが幸福であると思う。
	2	私は、信仰に裏打ちされた生き方こそ、人の真の生き方であると思う。	私は、信仰を持った生き方こそ、人の真の生き方であると思う。
	3	私は、どんなに科学が進んだとしても、人間は信仰がなければ幸せにはなれないと思う。	私は、人間は信仰がなければ幸せにはなれないと思う。
体験 7項目	1	私は、神がいつも自分と共にあり、神によって守られていると感じる。	私は、神さまがいつも自分と共にいて、私を守っていてくれると感じる。
	2	私は、教会で礼拝したとき、神様が現にそこにいることを感じる。	私は、礼拝のとき、神さまがそこにいることを感じる。
	3	祈りの中で、または日常生活の重要な場面で、私は、神を近くに感じる。	祈りの中で、またはふだんの生活の重要な場面で、私は、神を近くに感じる。
	4	私は、聖霊が私の人生で積極的に働いているのを感じる。	私は、私の人生の中で神さまの働きを感じる。
	5	私は、自分が、神の前にいるという感覚がある。	私は、自分が、常に神さまの前にいるという感覚がある。
	6	私は、包み込むような温かさを、神に感じる。	私は、神さまの包みこむようなあたたかさをを感じる。
	7	私は、神の愛をひしひしと感じている。	私は、神さまに愛されていると感じている。
共同体 5項目	1	私にとって、教会は親しみを覚える場所である。	私にとって、教会や礼拝堂は親しみを覚える場所である。
	2	私は、クリスチャンの友人と交わったり、その生き方を知ることによって、自らの信仰を省みている。	私は、クリスチャンの友人と交わったり、その生き方を知ることによって、自分自身を振り返ることがある。
	3	私は、自分の教会の仲間を素晴らしい人だと思う。	私は、自分のクリスチャンの友人を素晴らしい人だと思う。
	4	私は、教会の壮年会、婦人会、青年会などに参加することによって、教会の仲間と親しい交わりをしている。	私は、クリスチャンの集会に参加することによって、親しい交わりをしている。
	5	私は、クリスチャンの友人との交わりを通して、神のみ心を知ることがある。	私は、クリスチャンの友人とのまじわりを通して、神さまのみこころ（意志）について知ることがある。
効果報酬 4項目	1	私は、信仰によって、感謝する気持ちを学ぶことができた。	私は、キリスト教によって、感謝する気持ちを学ぶことができた。
	2	キリスト教は、私の人生の全てに影響している。	キリスト教は、私の人生に影響をおよぼしている。
	3	私は、信仰によって、悲しみがやわらげられ、救われた。	私は、キリスト教によって、悲しみがやわらげられ、救われたことがある。
	4	キリスト教は、私に、人生観、世界観、価値観の基準を与えてくれる。	私は、聖書のお話を聞くことによって、自分を見つめることができた。
効果責任 3項目	1	私たちは、毎週、礼拝に出席する義務がある。	私たちは、毎週、礼拝に出席する義務がある。
	2	私たちは、家族や周囲の人々に伝道する義務がある。	私たちは、キリスト教を家族や周囲の人々に伝える義務がある。
	3	私たちは、教会の中で奉仕する義務がある。	私たちは、神さまのために奉仕する義務がある。

いてはTable 3に示す。

(4) 援助行動尺度

松島（2007）の援助行動尺度を使用した。本尺度は、16項目からなる。選択肢は、「おこなったことがない、一度おこなった、数回おこなった、しばしばおこなった、いつもおこなった」の5段階評定（1～5点）である。本尺度においても、本研究における前期群、中期群を含めて作成されており、その信頼性、妥当性が確認されている（松島，2007）。本尺度については、前期群・中期群（中学・高校生）を対象に作成したが、後期群についても適用可能な項目として作成しているため、後期群についても同様の尺度を使用する。後期群における内的整

合性は、 $\alpha = .919$ であった。本尺度の項目はTable 4に示す。

2. 調査対象者

ホーリネス系教会に関わる前期群の回収数は79名であった。そのうち有効回答数は72名（有効回答率91.1%；男子23名，女子47名，不明2名；年齢12～15歳；16教会，4つのキャンプ）。

中期群の回収数は49名であった。そのうち有効回答数は46名（回収率93.9%；男性19名，女性27名；年齢；15～18歳；16教会，4つのキャンプ）。

後期群の回収数は78名であった。そのうち有効回答数

Table 2 宗教知識テスト（成人版—中高生版対応項目）

- ①旧約聖書の預言者ではないのは以下の誰ですか。
- (1)エリヤ (2)エレミヤ (3)パウロ (4)エゼキエル (5)イザヤ
- ②どれが旧約聖書の預言書に含まれていないものですか。
- (1)ゼカリヤ書 (2)ナホム書 (3)バルク書 (4)ハバクク書 (5)オバデヤ書
- ③4つの福音書を以下に書いて下さい。
- () () () ()
- ④以下のカッコの中を埋めてください。
- 4-1. 金持ちが神の国に入るよりも、()を通る方が簡単である。

Table 3 宗教行動尺度（成人版—中高生版対応項目）

	成人版	中高生版
1	あなたは、過去1年の間で、どれくらい礼拝に出席しましたか。	あなたは、過去1年の間で、どれくらい教会の礼拝に出席しましたか。
2	あなたは、過去1年の間で、どれくらい祈禱会に出席しましたか。	あなたは、過去1年の間で、礼拝以外のキリスト教の集会にどれくらい参加しましたか。
3	あなたは、この1ヶ月の間に、1日にどれくらい個人的に聖書を読みましたか。	あなたは、この1ヶ月の間に、1日にどれくらい個人的に聖書を読みましたか。
4	あなたは、この1年の間で、どれくらいキリスト教に関する書物(信仰書・霊想書)を読みましたか。	あなたは、この1年の間で、どれくらいキリスト教の本を読みましたか。
5	あなたは、この1年の間で、どれくらい家族や友人、知人にイエス・キリストや聖書の話をしましたか。	あなたは、この1年の間で、どれくらい家族や友人にイエス・キリストや聖書の話をしましたか。
6	あなたは、この1年の間で、どれくらい教会の仕事(教会のそうじ、聖務当番、週報の印刷など)を手伝って奉仕しましたか。	あなたは、この1年の間で、どれくらい教会の仕事(奏楽、献金当番、教会のそうじなど)を手伝って奉仕しましたか。

Table 4 援助行動尺度

お年寄りが道路をわたるのを手伝った。

困っている車イスの人を助けた。

困っているお年寄りを助けた。

困っている目や耳の不自由な人を助けた。

車イスの人が道路をわたるのを手伝った。

迷子を助けた。

電車やバスでお年寄り以外の困っている人(足の不自由な人、妊婦さんなど)に席をゆずった。

車イスの人が通れない所にある自転車などをどけた。

電車やバスでお年寄りに席をゆずった。

ころんだ子どもを助けた。

お年寄りの荷物を持った。

けがをした人の手当てをした。

道に迷っている人に声をかけて道案内をした。

落とし物を交番にとどけた。

落とし物をさがすのを手伝った。

募金をした。

は66名（回収率84.6%；男性24名，女性41名，不明1名；年齢；18～25歳；全国大会，2つのキャンプ，1つの特別集会，3教会）。後期群については，前期群，中期群と設定を統一するために，回答者本人が結婚している場合には本分析から外すこととした。

クリスチャン別の該当者数は，Ch-Ch群：前期群（以下，前とする）30名，中期群（以下，中とする）15名，後期群（以下，後とする）41名，Ch-NCh群：前7名・中5名，後9名，NCh-Ch群：前25名，中14名，後8名，NCh-NCh群：前6名，中10名，後5名であった。

3. 調査時期

前期群，中期群：2002年8月～12月。後期群：2004年8月～11月。

4. 手続き

個別記入方式による質問紙調査である。

- (1) **前期群，中期群** 教会での調査は，各教会に質問紙を郵送し，牧師もしくは中学・高校生クラスの教師の指示のもと個別に記入してもらい後日回収した。郵送以外の教会およびキャンプでは，筆者が教示を行い，一斉に調査を行い，その場で回収した。
- (2) **後期群** 教会での調査は，各教会に質問紙を郵送し，牧師の指示のもと個別に記入してもらい後日回収した。キャンプや全国集会等では，筆者が教示を行い，調査を

Table 5 各下位尺度得点の平均値（標準偏差），人数，分散分析結果

	青年期前期群				青年期中期群				青年期後期群			
	Ch-Ch	Ch-NCh	NCh-Ch	NCh-NCh	Ch-Ch	Ch-NCh	NCh-Ch	NCh-NCh	Ch-Ch	Ch-NCh	NCh-Ch	NCh-NCh
信念	13.13(3.47)	11.71(3.59)	11.00(3.61)	9.60(0.89)	12.38(3.71)	13.40(3.78)	11.23(5.07)	7.70(2.21)	15.13(3.04)	16.00(2.06)	10.38(1.92)	10.40(3.29)
	30	7	24	5	13	5	13	10	39	9	8	5
体験	29.63(6.85)	31.14(7.49)	24.50(7.03)	24.60(6.27)	28.54(7.87)	34.00(4.69)	6.46(10.88)	19.50(8.44)	32.32(6.00)	33.11(5.30)	23.13(6.22)	23.60(9.18)
	30	7	24	5	13	5	13	10	40	9	8	5
共同体	21.97(5.51)	25.14(5.08)	17.42(4.69)	16.60(3.78)	21.14(5.50)	25.80(3.11)	16.85(6.50)	16.70(4.22)	22.87(4.88)	25.78(3.53)	18.88(6.40)	22.80(4.87)
	30	7	24	5	14	5	13	10	39	9	8	5
効果報酬	18.97(3.23)	18.14(4.85)	15.13(3.79)	13.60(3.58)	18.86(3.72)	21.20(3.11)	16.86(5.53)	12.11(2.98)	21.02(2.54)	21.67(2.12)	14.00(3.30)	16.60(3.36)
	30	7	24	5	14	5	14	9	41	9	8	5
効果責任	14.07(2.90)	11.86(4.26)	12.24(3.78)	9.00(4.24)	14.00(3.28)	14.60(2.41)	11.36(4.96)	9.80(3.71)	12.44(4.52)	14.33(3.35)	11.25(3.62)	10.40(4.72)
	30	7	25	6	14	5	14	10	39	9	8	5
知識	4.47(2.03)	3.14(1.68)	2.92(2.50)	0.83(1.17)	4.14(2.35)	4.60(2.70)	2.79(2.67)	3.40(2.01)	5.61(1.39)	5.33(2.18)	3.63(2.62)	2.80(2.59)
	30	7	25	6	14	5	14	10	41	9	8	5
行動	21.83(5.05)	20.00(5.26)	18.52(4.42)	15.40(3.36)	19.93(5.62)	24.00(5.66)	15.79(4.19)	16.80(3.49)	20.61(5.02)	20.63(4.78)	14.50(4.34)	20.50(4.12)
	30	7	25	5	14	5	14	10	41	8	8	4

注. Ch-Ch: クリスマン・クリスマン家族群, Ch-NCh: クリスマン・非クリスマン家族群, NCh-Ch: 非クリスマン・クリスマン家族群, NCh-NCh: 非クリスマン・非クリスマン家族群

Table 5 (つづき) 各下位尺度得点の平均値（標準偏差），人数，分散分析結果

	主効果[F値(自由度)]		交互作用 [F値(自由度)]	多重比較[Tukey法]	
	年齢段階	クリスマン別		年齢段階	クリスマン別
信念	3.05 (2,156)	11.46** (3,156)	1.26 (6,156)		Ch-Ch, Ch-NCh > NCh-Ch, NCh-NCh**
体験	0.15 (2,157)	10.91** (3,157)	0.93 (6,157)		Ch-Ch, Ch-NCh > NCh-Ch, NCh-NCh**
共同体	2.57 (2,157)	12.52** (3,157)	0.57 (6,157)		Ch-NCh > Ch-Ch > NCh-Ch, NCh-NCh**
効果報酬	2.62 (2,159)	22.72** (3,159)	2.10 (6,159)		Ch-Ch, Ch-NCh > NCh-Ch, NCh-NCh**
効果責任	0.27 (2,160)	5.91** (3,160)	0.87 (6,160)		Ch-Ch, Ch-NCh > NCh-NCh**
知識	4.98** (2,162)	9.34** (3,162)	1.23 (6,162)	後期群>前期群, 中期群**	Ch-Ch > NCh-Ch, NCh-NCh** Ch-NCh > NCh-Ch, NCh-NCh*
行動	0.02 (2,159)	9.45** (3,159)	1.66 (6,159)		Ch-Ch, Ch-NCh > NCh-Ch** Ch-Ch, Ch-NCh > NCh-NCh*

* $p < .05$ ** $p < .01$

行い、期間内に回収するか、後日郵送してもらった。

全ての調査において、教示の際に、調査への回答を拒否する権利があることを伝えた上で調査を実施した。

結 果

1. ホーリネス系教会に関わる青年の「宗教性」の発達の差異の検討

ホーリネス系教会に関わる青年（175名）を対象として、「宗教性」の下位尺度得点ごとに、年齢段階（3群）とクリスマン別（4群）を2要因とする分散分析を行った（Table 5参照）。

その結果、宗教意識では、「知識」において年齢段階の主効果が確認され（知識： $F(2, 162) = 4.98$, $p < .01$ ）、Tukey法による多重比較を行った結果、後期群が前期群、中期群より有意に高い得点を示した（ $p < .01$ ）。しかし、「信念」、「体験」、「共同体」、「効果報酬」、「効果責任」には有意差がみられなかった。また、全ての下位尺度得点においてクリスマン別の主効果が有意であった（信念： $F(3, 156) = 11.46$, $p < .01$ ；体験： $F(3, 157) = 10.91$, $p < .01$ ；共同体： $F(3, 157) = 12.52$, $p < .01$ ；効果報酬： $F(3, 159) = 22.72$, $p < .01$ ；効果責任： $F(3, 160) = 5.91$, $p < .01$ ；知識： $F(3, 162) = 9.34$, $p < .01$ ）。Tukey法による多重比較を行った結果、「信念」、「体験」、「効果報酬」では、Ch-Ch群、Ch-NCh群 >

NCh-Ch群、NCh-NCh群（ $p < .01$ ）であった。「共同体」では、Ch-NCh群 > Ch-Ch群 > NCh-Ch群、NCh-NCh群（ $p < .01$ ）であった。「効果責任」では、Ch-Ch群、Ch-NCh群 > NCh-NCh群（ $p < .01$ ）であった。「知識」では、Ch-Ch群 > NCh-Ch群、NCh-NCh群（ $p < .01$ ）、Ch-NCh群 > NCh-Ch群、NCh-NCh群（ $p < .05$ ）であった。なお、全ての下位尺度得点において有意な交互作用はみられなかった。

「行動」では、クリスマン別の主効果（ $F(3, 159) = 9.45$, $p < .01$ ）が有意であったが、交互作用は有意ではなかった。クリスマン別の主効果についてTukey法による多重比較を行った結果、Ch-Ch群、Ch-NCh群 > NCh-Ch群（ $p < .01$ ）、Ch-Ch群、Ch-NCh群 > NCh-NCh群（ $p < .05$ ）であった。

2. 青年クリスマンの「宗教性」と援助行動との関連

「宗教性」各次元の分類については、各尺度を得点分布の2分の1ずつに分割し、低群、高群として設定した¹¹⁾。Ch-Ch群（86名）およびCh-NCh群（21名）における各群の人数はTable 6に示した。青年クリスマンにおいては、各群にばらつきがあり5名以下の群もみられることから、クリスマン別、年齢段階、低・高得点群別を組み合わせて群を設定し、ノンパラメトリック検定を行うこととした¹²⁾。

Ch-Ch群およびCh-NCh群において、「宗教性」と援

Table 6 Ch-Ch群およびCh-NCh群の「宗教性」各群の人数

	クリスチャン別	青年期前期群			青年期中期群			青年期後期群		
		低群	高群	合計	低群	高群	合計	低群	高群	合計
信念	Ch-Ch	17	13	30	10	3	13	11	28	39
	Ch-NCh	5	2	7	3	2	5	2	7	9
体験	Ch-Ch	18	12	30	8	5	13	18	22	40
	Ch-NCh	3	4	7	2	3	5	4	5	9
共同体	Ch-Ch	16	14	30	10	4	14	19	20	39
	Ch-NCh	2	5	7	2	3	5	2	7	9
効果報酬	Ch-Ch	19	11	30	10	4	14	14	27	41
	Ch-NCh	4	3	7	2	3	5	3	6	9
効果責任	Ch-Ch	14	16	30	4	10	14	21	18	39
	Ch-NCh	3	4	7	2	3	5	2	7	9
知識	Ch-Ch	21	9	30	10	4	14	15	26	41
	Ch-NCh	6	1	7	3	2	5	4	5	9
行動	Ch-Ch	14	16	30	5	9	14	20	21	41
	Ch-NCh	5	2	7	1	4	5	4	4	8

注1. Ch-Ch: クリスチャン・クリスチャン家族群, Ch-NCh: クリスチャン・非クリスチャン家族群

注2. 各群の得点分布(点)

[信念]低群: 5-14, 高群: 15-18
 [体験]低群: 15-31, 高群: 32-42
 [共同体]低群: 8-23, 高群: 24-30
 [効果報酬]低群: 11-20, 高群: 21-24
 [効果責任]低群: 3-13, 高群: 14-18
 [知識]低群: 0-5, 高群: 6-7
 [行動]低群: 6-20, 高群: 21-31

助行動との関連を検討するために、援助行動尺度得点を従属変数とする「信念別」、「体験別」、「共同体別」、「効果報酬別」、「効果責任別」、「知識別」、「行動別」のクラスカル・ウォリスの検定を行った (Table 7参照)。

その結果、Ch-Ch群では、「行動別」において有意差が認められた ($H(5, N=81)=13.34, p<.05$)。そこでマン・ホイットニーの検定 (ボンフェローニ修正済) によって各条件間の比較を行った結果、前期群Ch-Ch低群と前期群Ch-Ch高群との間のみ有意差が認められた。

Ch-NCh群では、全ての分析結果について有意差はみられなかった。

考 察

1. ホーリネス系教会に関わる青年の「宗教性」の発達の差異の検討

まず仮説1、仮説2について考察する。「宗教性」については、全ての下位尺度得点でクリスチャン群が最も高い得点を示した。この結果から、「クリスチャンであること」が「宗教性」の高さを示す要因となることが示され、仮説1は支持された。しかし、「信念」、「体験」、「効果報酬」、「効果責任」、「知識」ではCh-Ch群とCh-NCh群との間に有意な差はみられず、さらに「共同体」では、Ch-NCh群のほうが有意に高い得点を示したことから、仮説2は支持されなかった。ホーリネス系教会では、家族にクリスチャンがいるかどうかの要因では「宗教性」に差異がみられないことが示唆された。また、Ch-NCh群にとっては家族にクリスチャンがいないことから、Ch-Ch群以上に「共同体」が示す教会内での対人関係や教会への帰属感到強い関与を示すことが示唆された。

次に、仮説3について考察する。本研究では、「知識」のみに、後期群が前期群および中期群よりも有意に高い得点を示したが、それ以外の「宗教性」の下位尺度で有意な結果は示されず、仮説3は支持されなかったといえる。ホーリネス系教会では、年齢段階によっては「宗教性」に違いがみられないことが示唆された。

2. 青年クリスチャンの「宗教性」と援助行動との関連

ここでは、青年クリスチャンの「宗教性」と援助行動との関連について、Ch-Ch群およびCh-NCh群に分けてノンパラメトリック検定 (クラスカル・ウォリスの検定) を行った。

Ch-Ch群では、「行動別」においてのみ有意差がみられ、下位検定の結果、前期群Ch-Ch低群と前期群Ch-Ch高群との間に有意差が認められたが、それ以外の分析結果では、有意差はみられなかった。さらに、Ch-NCh群では、全ての分析結果について有意差はみられなかった。これは、Ch-Ch群、Ch-NCh群共に「宗教性」が援助行動に影響を与えない可能性を示唆するものであり、仮説4、仮説5は支持されなかった。

仮説は支持されないとの結果となったが、本研究における対象者数は決して多くはない。調査自体はできる限り多くの教会やキャンプ等を行ったが、この結果をそのままホーリネス系教会に関わる青年全体に適用するのは危険である。今回の結果を参考にしながら、青年期全般への面接調査を行うなどして、さらに詳細に検討していく必要がある。

総合的考察

本研究では、ホーリネス系教会に関わる青年の「宗教性」および援助行動の発達とその関連を検討した。

その結果、ホーリネス系教会に関わる青年では、「クリスチャンであること」は、「宗教性」の高さを示す要因となることが示されたが、「家族にクリスチャンがいること」では、「宗教性」に差異がみられなかった。また、青年クリスチャンにおける「宗教性」と援助行動との関連では、二世 (Ch-Ch群)、一世 (Ch-NCh群) とともに「宗教性」が援助行動に影響を与えない可能性を示唆する結果となった。

しかし筆者によるキリスト教主義学校中学・高校生を対象とした調査 (松島, 2006) では、「クリスチャンであること」と「家族にクリスチャンがいること」が「宗教性」の高さを示す要因となることが示されている。また、中学・高校生クリスチャンにおける「宗教性」と援助行動との関連では、二世では関連はみられなかったが、一世では、「宗教性」の一部が援助行動を促すとの結果が示され、青年期の前期から中期にかけて「宗教性」の一部が社会との関わりの中で発達する可能性が示唆された。

以上のように、ホーリネス系教会とキリスト教主義学校では、異なる特徴を示す結果となっている。なぜこのような異なる特徴を示したのであろうか。

ホーリネス系教会では、自覚的な回心体験を重視する傾向にある。杉山 (2004) は、様々な回心研究を概観した上で、回心体験が、教団、教派に存在する社会的文脈に依存していることを指摘している。ホーリネス系教会のなかに存在する「自覚的な回心体験を重視する傾向」が、ホーリネス系教会に関わる青年クリスチャンにも影響し、今回の結果においても顕著に現れた可能性が窺われる。また、キリスト教主義学校において「家族にクリスチャンがいること」も「宗教性」の高さを示す要因と

Table 7 Ch-Ch群およびCh-NCh群の各群における援助行動尺度得点の平均値、中央値、標準偏差、人数、ノンパラメトリック検定結果

	クリス チャン別	青年期前期群		青年期中期群		青年期後期群		H検定
		低群	高群	低群	高群	低群	高群	
信念別	Ch-Ch	<i>M</i>	35.56	43.62	39.33	34.00	32.82	36.00
		<i>Mdn</i>	35.50	44.00	37.00	31.00	31.00	34.50
		<i>SD</i>	15.18	15.05	12.86	6.08	8.38	14.53
		<i>N</i>	16	13	9	3	11	26
	Ch-NCh	平均ランク	35.41	51.50	44.00	35.83	33.73	37.33
		<i>M</i>	34.00	37.00	37.33	47.50	45.50	32.57
		<i>Mdn</i>	36.00	37.00	38.00	47.50	45.50	32.00
		<i>SD</i>	7.52	7.07	3.06	21.92	2.12	8.62
体験別	Ch-Ch	<i>N</i>	5	2	3	2	2	7
		平均ランク	9.90	11.50	13.00	14.00	18.25	7.86
	Ch-NCh	<i>M</i>	35.61	45.00	40.00	35.20	34.06	35.80
		<i>Mdn</i>	35.50	44.00	37.00	34.00	34.00	32.50
		<i>SD</i>	16.16	12.63	14.67	5.07	9.84	15.20
		<i>N</i>	18	11	7	5	18	20
共同体別	Ch-Ch	平均ランク	35.89	55.45	44.86	39.30	36.50	36.83
		<i>M</i>	33.00	36.25	37.00	44.33	38.00	33.40
		<i>Mdn</i>	36.00	37.00	37.00	38.00	38.50	32.00
		<i>SD</i>	6.08	8.10	4.24	16.44	8.98	10.26
	Ch-NCh	<i>N</i>	3	4	2	3	4	5
		平均ランク	9.33	11.13	12.50	14.00	12.63	8.20
	Ch-Ch	<i>M</i>	34.88	44.46	38.90	34.67	31.53	38.61
		<i>Mdn</i>	34.50	44.00	37.00	34.00	28.00	37.00
効果報酬別	Ch-Ch	<i>SD</i>	15.79	13.66	12.34	5.03	13.02	12.25
		<i>N</i>	16	13	10	3	19	18
	Ch-NCh	平均ランク	34.69	53.69	44.15	37.83	29.03	44.47
		<i>M</i>	31.50	36.20	37.00	44.33	41.00	33.86
		<i>Mdn</i>	31.50	36.00	37.00	38.00	41.00	32.00
		<i>SD</i>	7.78	7.01	4.24	16.44	8.49	9.65
	Ch-Ch	<i>N</i>	2	5	2	3	2	7
		平均ランク	8.00	11.30	12.50	14.00	15.00	8.79
効果責任別	Ch-Ch	<i>M</i>	35.50	45.18	40.56	32.00	35.79	34.28
		<i>Mdn</i>	35.50	44.00	37.00	30.50	34.00	32.00
		<i>SD</i>	15.40	14.02	11.93	6.38	9.50	14.30
		<i>N</i>	18	11	9	4	14	25
	Ch-NCh	平均ランク	37.47	56.09	49.11	32.75	40.86	35.38
		<i>M</i>	34.75	35.00	37.00	44.33	39.67	33.33
		<i>Mdn</i>	34.50	36.00	37.00	38.00	44.00	32.50
		<i>SD</i>	7.63	7.55	4.24	16.44	10.21	9.18
知識別	Ch-Ch	<i>N</i>	4	3	2	3	3	6
		平均ランク	10.13	10.67	12.50	14.00	13.83	8.33
	Ch-NCh	<i>M</i>	36.62	41.25	35.50	39.00	34.05	36.44
		<i>Mdn</i>	35.00	40.50	35.50	37.00	31.00	34.50
		<i>SD</i>	16.97	14.21	4.65	13.06	12.20	13.83
		<i>N</i>	13	16	4	9	19	18
	Ch-Ch	平均ランク	36.62	48.38	39.75	43.50	34.82	38.78
		<i>M</i>	33.00	36.25	37.00	44.33	45.50	32.57
行動別	Ch-Ch	<i>Mdn</i>	36.00	37.00	37.00	38.00	45.50	32.00
		<i>SD</i>	6.08	8.10	4.24	16.44	2.12	8.62
		<i>N</i>	3	4	2	3	2	7
		平均ランク	9.33	11.13	12.50	14.00	18.25	7.86
	Ch-NCh	<i>M</i>	43.55	29.44	37.89	38.00	37.93	33.08
		<i>Mdn</i>	41.50	26.00	37.00	35.50	31.50	33.00
		<i>SD</i>	15.89	8.71	12.13	9.76	17.50	8.92
		<i>N</i>	20	9	9	4	14	25
行動別	Ch-Ch	平均ランク	52.08	27.78	43.44	45.50	39.79	35.98
		<i>M</i>	34.67	36.00	47.00	33.00	35.75	35.20
		<i>Mdn</i>	34.50	36.00	40.00	33.00	34.00	32.00
		<i>SD</i>	7.58	13.89	1.41	10.44	9.78	9.78
	Ch-NCh	<i>N</i>	6	1	3	2	4	5
		平均ランク	9.58	15.67	8.50	10.13	9.60	9.60
		<i>M</i>	29.92	46.69	32.80	41.13	34.79	34.85
		<i>Mdn</i>	26.00	45.00	34.00	40.50	32.00	34.00
行動別	Ch-Ch	<i>SD</i>	8.30	15.91	4.76	12.87	13.42	12.27
		<i>N</i>	13	16	5	8	19	20
	Ch-NCh	平均ランク	28.96	57.19	35.30	49.56	36.53	38.13
		<i>M</i>	31.60	43.00	40.00	41.75	36.00	35.50
		<i>Mdn</i>	32.00	43.00	40.00	36.00	36.00	33.50
		<i>SD</i>	5.03	1.41	14.38	11.11	10.54	10.54
		<i>N</i>	5	2	1	4	4	4
		平均ランク	7.40	14.75	12.00	9.75	9.13	9.13

注. Ch-Ch: クリスチャン・クリスチャン家族群. Ch-NCh: クリスチャン・非クリスチャン家族群

a) 下位検定(U検定): ボンフェローニ修正済

z=-3.01: 青年期前期群Ch-Ch高群(平均ランク19.28) > 青年期前期群Ch-Ch低群(平均ランク9.73)*

*p<.05

なったのは、ホーリネス系教会とは異なりキリスト教主義学校のみではクリスチャンであることが少数派であるため、自分自身がクリスチャンであることの後ろ盾(支え)になる家族の存在がより強く影響したのではないと思われる。

さらに、「宗教性」と援助行動との関連についても同様な傾向が現れたのではないかと推察される。筆者

もホーリネス系教会に関わった経験があると記したが、ホーリネス系教会では、個人の信仰成長を重視する傾向にあり、社会との関わりについては積極的に進めることが少なかったように感じられることが多い。反対に、松島(2006)で調査したキリスト教主義学校では、ボランティア活動など社会との関わりを積極的に進める傾向にある。すなわち、それぞれの教会、学校における教育方

針や指導の在り方が関係したと推察される。そのように考えると、教会および学校における宗教教育の影響も関係しているといえるのではないだろうか。西本（1992）は、子どもの信仰形成において家族からの影響が大きいとしながらも、直接の信仰形成にあたっては、教会やキリスト教主義学校が担うことになる」と述べている。教会および学校における宗教教育の影響については、今回の調査では明確に示すことはできなかったため、これらの点について、今後、詳細に検討していく必要があると思われる。

引用文献

- 安斎 伸. (1985). キリスト教の人間形成. 日本宗教学会「宗教と教育に関する委員会」(編), *宗教教育の理論と実際* (pp. 47-53). 東京: すずき出版
- Batson, C.D., Schoenrade, P., & Ventis, W.L. (1993). *Religion and the individual: A social-psychological perspective*. New York: Oxford University Press.
- Cornwall, M., Albrecht, S.L., Cunningham, P.H., & Pitcher, B.L. (1986). The dimensions of religiosity: A conceptual model with an empirical test. *Review of Religious Research*, 27, 226-244.
- 堂野佐俊・堂野恵子. (2000). *発達理解の心理学*. 東京: プレーン出版
- Glock, C.Y. (1962). On the study of religious commitment. *Religious Education Research Supplement*, 57, 98-110.
- Glock, C.Y., & Stark, R. (1965). *Religion and society in tension*. Rand McNally & Company.
- Glock, C.Y., & Stark, R. (1966). *Christian beliefs and anti-Semitism*. New York: Harper & Row.
- 長谷川浩一. (1969). 発達. 高崎 毅・山内一郎・今橋 朗 (編), *キリスト教教育辞典* (pp. 414-421). 東京: 日本基督教団出版局
- Hill, P.C., & Hood, R.W. Jr. (1999). *Measures of religiosity*. Birmingham, AL: Religious Education Press.
- Hood, R.W. Jr., Spilka, B., Hunsberger, B., & Gorsuch, R. L. (1996). *The psychology of religion: An empirical approach* (2nd ed.). New York: Guilford Press.
- 星野 命. (1977). 宗教意識の発達. 依田 新 (編), *新・教育心理学事典* (pp. 376-377). 東京: 金子書房
- 星野 命・安倍北夫. (1964). 基督教主義学校生徒の宗教意識と宗教的概念に対する態度について. *日本教育心理学会第6回総会発表論文集*, 94-95
- Hyde, K.E. (1990). *Religion in childhood and adolescence: A comprehensive review of the research*. Birmingham, AL: Religious Education Press.
- 今田 恵. (1955). 宗教意識の発達. 牛島義友・桂 広介・依田 新 (編), *青年心理学講座: 1巻 文化と人生観* (pp. 99-145). 東京: 金子書房
- 稲場圭信. (1998). 現代宗教の利他主義と利他行ネットワーク: 立正佼成会を事例として. *宗教と社会*, 4, 153-179
- 石黒彰二. (1984). 児童青年の宗教意識における性差と地域差. *愛知学院大学文学部紀要第14号*, 愛知学院大学, 愛知, 1-28
- 石黒彰二・酒井亮爾・許 心華・山田ゆかり. (1986). 児童青年の宗教意識に関する研究: 日本と台湾の比較. *愛知学院大学人間文化研究所「人間文化」第2号*, 愛知学院大学, 愛知, 96-127
- 松井 豊. (1998). 援助行動の概念と研究の流れ. 松井 豊・浦 光博 (編), *対人行動学研究シリーズ: 7 人を支える心の科学* (pp. 2-8). 東京: 誠信書房
- 松島公望. (2005). 日本人クリスチャンにおける宗教意識尺度の開発: プロテスタント教会一教派 (ホーリネス系教会) を対象にして. *学校教育学研究論集第11号*, 東京学芸大学, 東京, 13-28
- 松島公望 (2006). キリスト教における「宗教性」の発達および援助行動との関連: キリスト教主義学校生徒を中心にして. *発達心理学研究*, 17, 282-292
- 松島公望 (2007). *プロテスタント・キリスト教に関わる日本人の宗教性発達に関する心理学的研究—ホーリネス系教会およびキリスト教主義学校を対象として—*. 東京学芸大学博士論文
- 中村陽三. (1976). 青年期における宗教意識に関する実証的比較研究: 公立校生徒とキリスト教学校生徒との比較. *日本私学教育研究所紀要第11巻第1号*, 東京, 157-177
- 西本 望. (1992). キリスト教と社会化過程: 信仰形成の過程に至る子どもの宗教体験. *キリスト教主義教育: キリスト教主義教育研究室年報第20号*, 関西学院大学, 兵庫, 53-74
- Sam, H., & Gustavo, C. (2005). Religiosity and prosocial behaviours in adolescence: The mediating role of prosocial values. *Journal of Moral Education*, 34, 231-249.
- Schludermann, E.H., Schludermann, S.M., & Huynh, C. L. (2000). Religiosity, prosocial values, and adjustment among students in Catholic high schools in Canada. *Journal of Beliefs and Values*, 21, 99-115.
- Spilka, B., Hood, R.W. Jr., Hunsberger, B., & Gorsuch, R. L. (2003). *The psychology of religion: An empirical approach* (3rd ed.). New York: Guilford Press.
- 杉山憲司. (1992). 愛他行動. 東 洋・繁多 進・田島 信元 (編), *発達心理学ハンドブック* (pp. 807-814). 東京: 福村出版
- 杉山幸子. (2004). *新宗教とアンデンティティ: 回心と癒しの宗教社会心理学*. 東京: 新曜社
- 高橋省己. (1958). 宗教意識の発達. 波多野完治 (編), *現代教育心理学大系第4巻 人間における諸機能の発達* (pp. 313-324). 東京: 中山書店
- Verbit, M.F. (1970). The components and dimensions of religious behavior: Toward a reconceptualization of religiosity. In P.E. Hammomd, & B. Johnson (Eds.), *American mosaic* (pp. 24-39). New York: Random House.

脚 注

- 1) そのため「ホーリネス系教会」は、メソジスト系として位置づけられている場合もある。
- 2) 援助行動とは、「外的な報酬や返礼を目的とせず、自発的に行われた、他者に利益をもたらす行動（松井, 1998）」と定義され、向社会的行動の一種でその日常的な典型例として用いられている（杉山, 1992）。
- 3) 稲場（1998）は、立正佼成会を事例として、日本の現代宗教における利他主義に関する研究を行っている。しかしこの論文は、教団としての利他主義の在り方に焦点が当てられており、本研究が示す「宗教性」と援助行動との関連とは趣旨が異なる内容となっている。
- 4) 家族内のクリスチャンについては、「父・母・兄・姉・弟・妹・祖父・祖母・おじ・おば・その他」を質問紙で設定し、多重回答してもらった。その結果、家族にクリスチャンがいる場合、父ないし母がクリスチャンである割合が、クリスチャン・クリスチャン家族群では、43.5%、非クリスチャン・クリスチャン家族群では、41.3%であった。父母以外の家族がクリスチャンである割合は、全て10%未満であった。
- 5) 日本人クリスチャンのなかでは、親もクリスチャンである「クリスチャン二世」、親がクリスチャンではない「クリスチャン一世」に分けて語られることがある。
- 6) 「効果」は、宗教意識と宗教行動の両側面を含む構成概念だが、回答者の認知的、感情的側面を測定することを目的とするために、宗教意識尺度に含めることとする。
- 7) 「知識」は、構成概念としては宗教意識に含まれるが、設問は知識の有無を調べるテスト形式をとらざるを得ず、評定法を使用する宗教意識尺度（単一尺度）として扱うことができない。したがって、宗教意識尺度とは別に宗教知識テストを作成することとする。
- 8) 効果責任の選択肢については、「まったく義務がない、あまり義務がない、少し義務がある、中程度に義務がある、強い義務がある、非常に強い義務がある」とした。
- 9) 宗教知識テストについては、できる限り幅広い範囲から出題するように作成されたため項目内容や回答方法の違いがある。この作成の経緯から他の尺度とは異なり a 係数において高い数値を示さなかったと思われる。
- 10) たとえば、礼拝出席、キリスト教の集会では、「ほぼ毎週出席した、月に 2, 3 回出席した、月に 1 回くらい出席した、数ヶ月に 1 回くらい出席した、1 年に 1, 2 回くらい出席した、まったく出席しなかった」とした。また、聖書通読では、「毎日、3 回以上読んだ、毎日、2 回くらい読んだ、毎日、1 回は読んだ、1 週間に数回は読んだ、たまにしか読まなかった、まったく読まなかった」とした。
- 11) 群分けの際にも、成人版、中高生版の両方に対応している項目のみを抽出し、抽出した項目から尺度得点を作成した。作成した尺度得点の得点分布から低群、高群を設定した。
- 12) 対象者が 1 名の群については、分析から除外した。